昭和三十一年七月

厚眞村古代史

―村内に存在する先住民族の遺跡―

厚眞村教育委員会
厚眞村郷土研究会

序

厚真村長　井上正則
厚真村議会議長　斎藤吉之助

曾つて本村の幾多開拓者が不毛の荒野に鍬を下し、あらゆる辛酸をなめて子孫のために営々開拓の実を挙げ、その苦闘と努力の結晶が現在見られる「厚真」を形造つたものであるが、時勢の進運に伴い自治制の施行と共に今や画期的な一大飛躍を遂げつゝある本村が、本年、開村六十周年の記念すべき年を迎えた。

この時に当つて、曾つての厚真村長であられた、亀井喜久太郎氏を始め同好の諸氏が、郷土の歴史に深い関心と熱意を示して確実な資料を正しく研究せられ、人類の発達と、文化の向上のため辿つて来た本村先住民族の分布と、生活の歴史を明らかにする一書を発刊して知識を一般に広く分かとうとしたことは、誠に時宜を得た企画であり心から敬意を表する次第である。

今後もこの研究が続けられて、刊を重ねて成果の発表を見るものと期待されるが、このことは「温故知新」将来に向つての本村の進運にも大きな示さを与えるものであり、人類先人の事績を盛つたこの文献は必ずや後代の者にも明朗な解答を与えるものと確信するものである。本書が開村六十周年の記念すべき年に発刊の運びになつたことは誠に意義あることで、喜こびに堪えない処である。

刊行の辞

渺茫たる太平洋を南に望み、厚真川流域一帯を占める我が厚真は、今では胆振の穀倉として、広く名声を謳われるに到つたが、明治の初期ようやく和人の移住が始まつた程度で、本格的開拓は明治二十年代の末期からである。

この点から見れば、村の歴史は極めて浅いように考えられるが、決してそうではない。松浦武四郎の「東蝦夷日誌」は、重要なる文献であるが、これによれば安政年間本村内に、二つの大きな原住民部落があり、既に農耕も行われていたと、記されている。

更に村内各地域から現われる、土器や石器によつて、五六千年代から、人間の生存していたことが実証されている。

歴史は、人類生活の記録と言われている。然し、歴史は年と共に移り、時と共に流れて、往古先人の歩んだ道は、すべて神秘の扉に鎖されてしまつた。想像を許すならば時に安住楽土の時があつたとしても、多くは日夜食を求めるを事とし、或は猛獣に向い、或は天災地変に悩み、更に人類相剋の戦乱に苦闘を続けたであろう。

これらの扉の奥に秘む、先人の生活の跡を探り究める方法として、先人の遺した、いわゆる埋没文化財の研究が、極めて大切な仕事の一つである。

本村の文化協会の一部門である郷土研究会の会員が、じみではあるが、撓まざる努力を続け多年に亘る研究の集成を、一冊子として上梓を見るに到つたことは、今後の文化活動の上に、大なる稗益を与えるもので、誠に欣快に絶えない。この成果によつて、私たちは、本村の歴史を学び、今日の生活をよりよいものにし明日からの、新しい歴史を、きずきあげて、ゆきたいと思う。

特に内容については、北海道大学児玉作左衛門博士、同大場利夫博士の懇篤なる指導を受けることができたことは、誠に感謝に絶えないところである。

尚発刊については筒井善太郎氏、楠木只久氏両氏の絶大なる後援を得たことと、本研究に対して常に卒先熱心に尽された、古谷信光氏を始め各会員に謝意を表する次第である。

昭和三十一年六月

厚真村教育委員会教育長　佐藤友治

厚真村郷土研究会長　龜井喜久太郎

目次

一　緒言……一
二　遺跡を尋ね初めた頃の記録……一
三　厚真村の遺跡調査の実績……二
四　南部地区の遺跡の状況……三
　1　概況……三
　2　浜厚真……四
　3　周文……四
　4　上厚真……四
　5　上周文……四
　6　軽舞……七
　7　当麻内……七
　8　西周文……七
五　中部地区の遺跡の状況……八
　1　概況……八
　2　振老、近悦府近郊……八
　3　仁遠幌……九
　4　上振内……九
　5　振内……九
　6　東老軽舞……一〇
六　北部地区の遺跡の状況……一〇

1 概況……一〇
2 楢山……一二
3 皃内……一三
4 頗美宇……一三
七 結言……一六
附表第一 発見された遺物の一覧表……一七
附表第二 遺跡の所在地……一八

写眞 1　振老の住居跡（清水靖吾氏宅地内）遠景

写眞 2　周文の竪穴様食料貯蔵跡（宮崎宅次郎氏宅地内）
（北大理学部石井氏撮影）

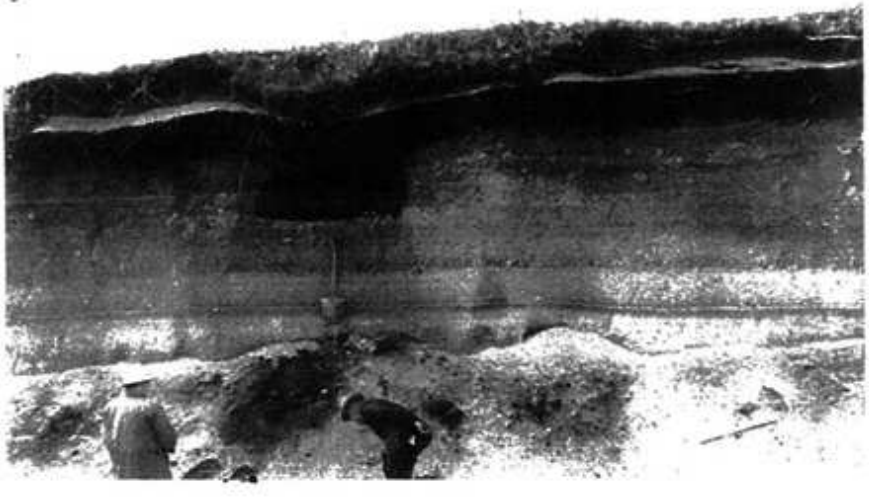


写真3 厚真高丘の土器1

写真4 厚真高丘の土器2

写真 5　参考品　円筒下層式（左）、円筒上層式（右）土器
（北大医学部児玉博士所蔵）

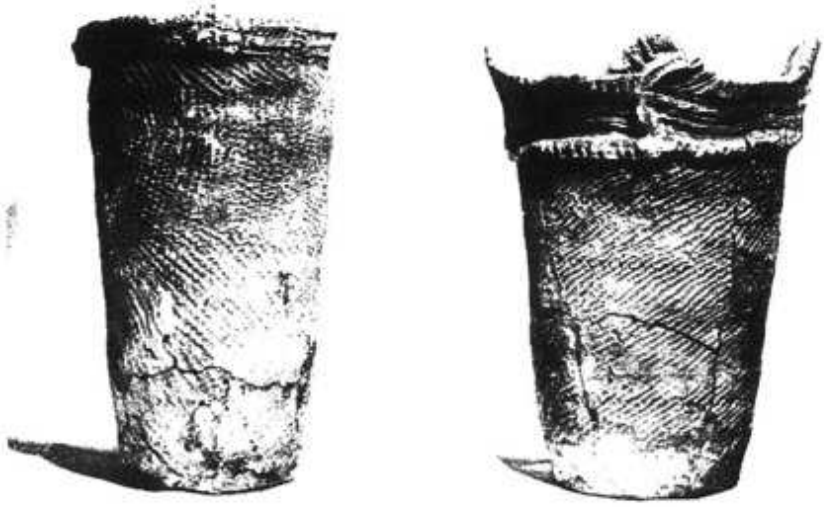


写真 6　厚真郷土研究会の人々

（前列向つて右より亀井喜久太郎、楠木只久、筒井善太郎、　後列　大畑信吉、谷垣俊次、亀井一雄、西村和郎、今多重義、吉谷信光、佐藤友治、畑井健司
左上　安倍英一）

写真説明

1　振老に存在する住居址の遺景

2　周文の竪穴線食料貯蔵址と思われる遺跡
（昭和三十年五月調査の実況、人物は左大場博士右亀井氏、北海道大学石井次郎氏撮影）

3　厚真（振老）出土の土器　左後北式注口土器　右亀ケ岡式双口土器

4　厚真出土の土器　左中野峠式土器　右栗沢式土器

5　土器参考品　左円筒下層式土器、右円筒上層式土器
（北海道大学児玉作左工門博士所蔵）

6　厚真郷土研究会の人々

厚眞村古代史

――村内に存在する先住民族の遺跡――

一　緒　言

当村の和人による開拓については、本村発行の村史の沿革の項に、詳にされているところであるが、開拓以前の歴史については、現在なお未解決の幾多の事実を残したまゝの状態である。

人類の発達と共に栄えた文化はその停止するところを知らないと同様、残された先人の歴史もその深さは計り知れない。しかし近来その歴史をひもとく人々も数多く出て、時には自己の終生を投げ出して追究を重ねている学者も多い。将来、それらの人々によって研究された文献と、提供された幾多の資料を基にして、次の世代の人々によって、なお一層の研究が行われんことを期待している。我々の年代に於て繰り広げられた此の種の探究は相当の深さを歩んでいるとは考えつゝも、夫々専門的な鑑識眼と経験を持ち合せていないため、郷土について頗る未完成のものであるが、ここに一書をまとめて見た。

将来郷土史を研究しようとする人々が、本書を基にして更に努力と前進を希う為にも、ここに敢て拙文を呈して、我々の歩みつゝある姿を記す次第である。

二　遺跡を尋ね初めた頃の記録を辿つて

旧土人及び和人が当村に住みつく以前の厚真村に、先住民が住んでいたことを証明する資料として、その当時生活のために用いたと考えられる、土器、石器或は鉄製品がある。之等は長年月の間風雨に晒されるものが現在まで土中深く埋もれて残つたもので、工事や農耕の際掘出され、その形態や埋もれている姿によつて、年代や用途が判断されているのであるが、之等は過去の歴史を語る好個の資料とされている。当村に於ても、古く

から之等の研究は重ねられていたことと考えられるが、現在記録に残されたものがすくないため詳でない。然し先般当村所蔵の文書を整理中、大正五年六月三日当時の厚真村長赤島岩蔵氏より、厚真第一尋常高等小学校長門田雄次郎氏宛に、古土器保管の件を認めた公文書が見出された。本文書は当時の状況を語る文献としては唯一であり甚だ貴重なものと思われるのでここに掲載する。

（大正五年庶務に関する書類厚真村役場保存）　大正五年六月三日

厚真村長　赤島岩蔵

厚真第一尋常高等小学校長門田雄次郎殿

古土器保管ノ件

部内内山伊三郎外九名ニテ掘出シタル古土器ハ参考資料トシテ教育上稗益スル処不尠ト認メ候ニ付保管方委託候条御了知相成度候也

調　書

名称及形状等　土瓶及置物、飯食器ニ類シタル古土器ニシテ採掘シタル箇所ノ上部ニハ巨木ノ在リシ所ヨリ考フル時ハ古代ノ物タルガ如シ

掘出シタル場所　厚真村字ウクル太旧専厚寺門前ノ六尺位下位置ヨリ掘出シタリ

掘出シタル年月日　大正五年五月十九日振老用水暗渠土盛工事中発見同日午後四時採取シタリ

掘出シタル人名　内山伊三郎、山田吉次郎、背戸川庄次郎、米沢信蔵、山崎要次郎、保田隆利、保田　孝、佐伯米次郎、東政次郎、大岡甚右工門

三　厚真村の遺跡調査の事績

村内各地より掘出された先住民族の遺物、或は遺跡については、本村の古老米沢信蔵氏の語るところによれば、明治三十八年振老用水路を設置するための掘さく工事中、土中より相当量の土器が出土したと言われているが、現在これらの遺物は殆んど保存されていない。その後大正九年同地点を通過する厚真・幌内間の森林軌道敷設工事中に、これと類似の遺物が出土したと言われている。また大正十二年同じく村有道路設置の際、高さ六、七尺約三反歩程度の除土を行つたが、その際にも遺物が発見されている。これら数度に亘る工事中の偶然の発見が、もし現今のように研究の盛んな時期に行われたものであつたならば、それを利用して相当基礎的な研究が出来たことであろうと考えられ、誠に惜しまれる次第である。

組織的な研究調査を進められぬ時期であつたが、昭和四年から同十年に至る間、厚真中央小学校に在職していた満江一弘先生は、郷土史研究に熱心で、生徒と共に遺跡を視察して路上に露出した土器の採集を行ひ、学校の教材に利用したと言われているが、蒐集された此の土器類は昭和二十年

終戦の際に、どんな理由かすべて投げ捨てられて終い、現在迄に保存されたものは殆んど見当らないのはかへす〳〵も残念である。

昭和二十五年春元厚真村長であつた亀井喜久太郎氏が札幌市へ旅行し、その頃㈱今井百貨店で開催中の、住吉町遺跡の展示会を見学した際に、北海道大学教授児玉作左衛門博士に面会の機会を持ち、厚真村で出土する土器の話をした処児玉教授は頗る興味を持たるゝと共に、種々質問を受けた。亀井氏は更に之等の遺物の発掘や処置について、指導を受けて帰村したが、以来先史時代の遺物の探究に興味を持ち、村内の此の種出土品に注目すると共に、全国的に拡がつた考古学研究に伴う新聞発表を詳細に取材保存する傍ら同志を募つていた。児玉博士はその後間もなく当村を訪ずれ、フレオイ地区の状態をつぶさに視察されて出土する遺物の量の多いことに驚ろかれ、正式に発掘調査をすることを将来に残されて帰札された。尚昭和二十七年八月十三日東京大学文学部講師日本民族学協会理事八幡一郎先生が来村され、トニカ方面を視察研究された。その折トニカの吉村健太郎氏宅附近で、縄文土器の破片一箇を見出され持ち帰られた。

昭和二十八年十月亀井氏は遂に同好の人々を募つて、厚真村郷土研究会を結成し、初代会長に就任した。なお会員は左の人々によつて作られ、村内の各所を調査研究をなし、現在に至つたが、本会の重なる記録は別稿の如きものである。

（会員氏名）亀井喜久太郎、筒井善太郎、楠木只久、西村和郎、畑井健司、今多重義、安倍栄一、大屋常吉、古谷信光

昭和三十年五月七、八日の両日に亘り児玉博士の内示を受けた北海道大学講師の大場利夫博士は、同大学理学部地質学教室助手の石井次郎学士と共に、本村の遺跡の概略の調査に来村された。それによつて当時徐々に郷土室へ蒐集展示しつゝあつた土器類について、再確認を受け、更に土器、石器の年代、土器の種類などについて克明に教示を受けた。また同時に郷土研究会の亀井、古谷等を始め会員は、同氏らを案内して過去の出土地点を一日がかりで歴訪した。以下各項目に亘り発表せんとする土器の年代、土器の種類は、殆んどその節の御指導によつたものである。

四　南部地区の遺跡の状況

1　概　説

厚真村の南部方面中、浜厚真は、白老、勇払、鵡川、日高方面の通路となつて発達し、更に上周文を経て軽舞から似湾方面への通路でもあつた。海岸線としても平坦な此の地方は、村の文化の発祥の地でもあつたろう。周文地区の丘陵は当時の海岸線でもあつたものの如く、先住民族が住んでいたと考えられる、幾多の遺跡が発見されるし、また墓穴とも考えられるものもある。本地帯は今後更に探究する地点として注目される。

2　浜　厚　眞（厚真村字トアッマ九五一の一番地）（遺跡番号1）

坂本氏所有の畑地から出土した遺物は、昭和二十九年五月客土の折発見されたものだが、此の土器は石器時代の中期（四、五千年前）のものと言われる円筒上層式土器の破片数箇である。

3　周　文（遺跡番号2）

周文部落の南端にある宮崎氏の屋敷内には、今もつて続々と円筒式土器の破片が出土し、また近くの火山灰層の下部には先住民の埋葬地と思われる地点も見られる。昭和三十年春来村した北大大場博士の見るところでは、これらには死人を埋葬した竪穴式墳墓と、食料貯蔵庫とがあると言われている（石井次郎、厚真村字周文の竪穴様の食料貯蔵趾について「先史時代」第二輯昭和三十年十一月参照）。今回調査を行つた際に、前に発見したものと同一の土器破片を発見したが、完形品がないのは残念であつた。標高五十米余の高台が連々と延びる此の地点は、おそらく先住民族の住居としては、好適だつたものであろう。こゝを調査すれば当時を語る多くの歴史的な資料が埋蔵されていることゝ考えられる（附図第一図1・2・3）。

附図説明　第1図1　円筒式上層式土器の地方型式で極めて特色のある土器で、勇払郡、沙流郡に分布している。2・3円筒上層式土器破片。

4　上　厚　眞（遺跡番号4）

上厚真小学校所在の高台地より、南に延びる丘陵地帯には、旧土人の住居跡が最近まで残存していて、古老の語り草となつているが、先住民族の住居趾も、出土する土器の箇所及び数量より考えれば、決して尠くないものと考えられる。

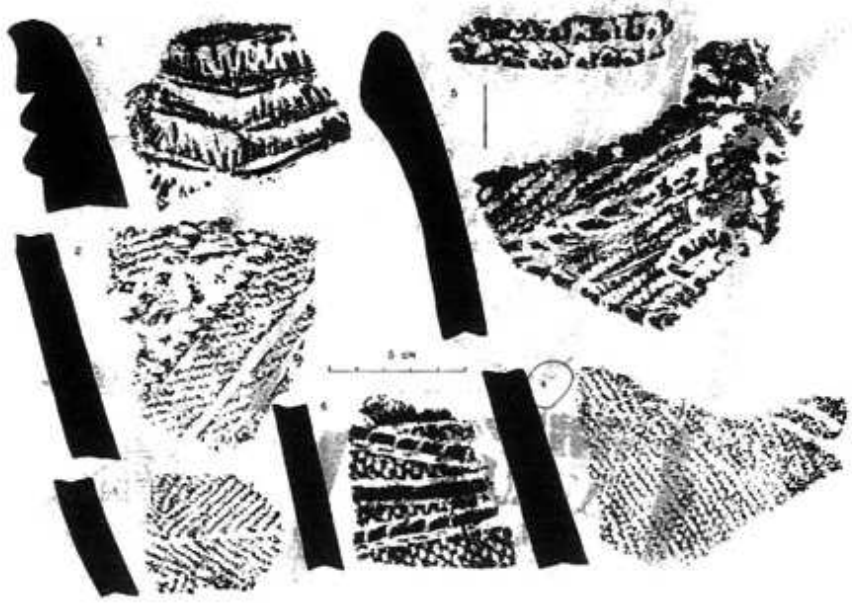
昭和二十年上厚真小学校運動場（ノヤスベ二三一の三番地）増設工事の折、東側の高地より数多く土器破片及び石器破片が出土している。学校の北側の軽舞川のほとりの台地（長地）にも、二十八年頃発見された数多くの土器類があり、郷土室に保存されている。その種類は石器時代の中期に属する円筒上層式のものと、後期より晩期に及んだ前北式土器も混つている（附図第一図4）。

附図説明　第1図4は前北式といわれている土器破片

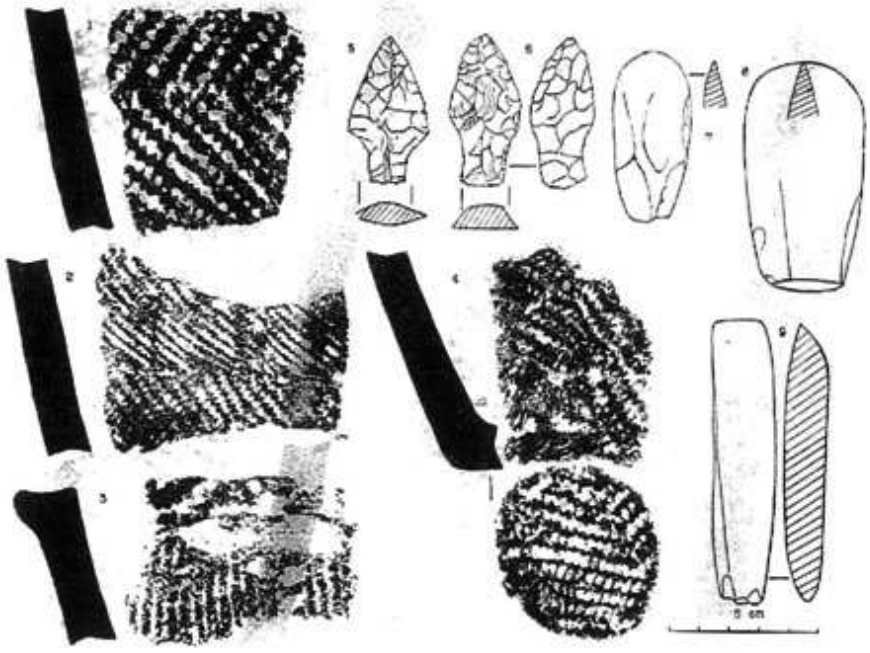
5　上　周　文（遺跡番号5）

上厚真市街の東方に当り、軽舞部落へ向つて歩むこと約二粁の地点の附近で、道路工事の際見出された土器は、破片であるが、円筒式土器であ

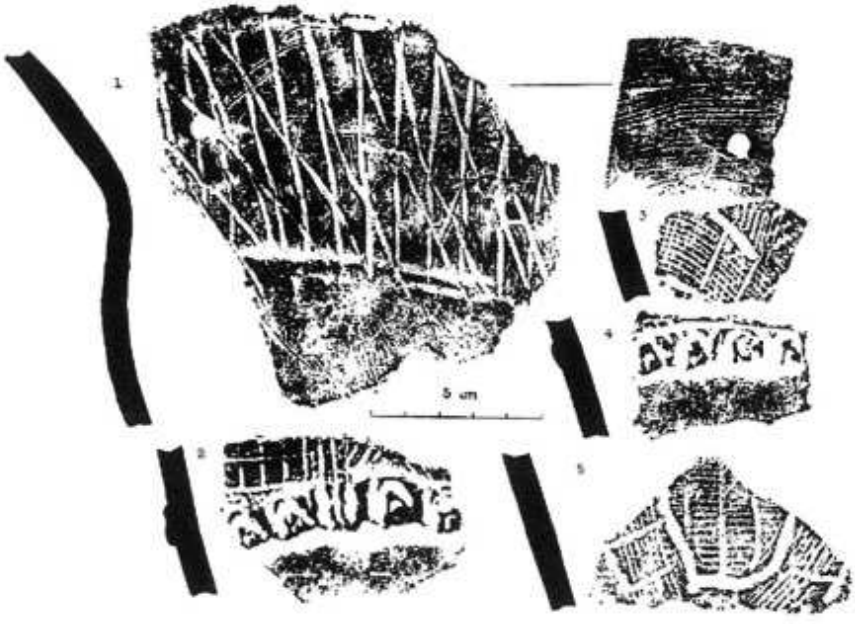
第 1 図　周文・上厚真・上周文発見の土器
（1, 2, 3 周文　4 上厚真　5,6上周文）



第 2 図　軽舞発見の土器及び石器



第3図 当麻内発見の土器



第4図 朝日ケ丘発見の土器

る。此の附近は小川に沿つて拡がる平地で、周辺の状況と考え合わせれば、先住民族の住居として、裏付けるものが、相当存在しているものと考えられる。本地帯は今後の調査が期待される（附図第一図5・6）。

附図説明　第1図5・6円筒上層式土器破片、いずれも地方色が濃い。

6　輕　舞（カルマイ九七〇の一二番地）（遺跡番号6）

昭和二十四年五月輕舞小学校が移転改築のため現在地を整地したが、その折校庭前から相当量の土器破片が掘出された。学校長が教育の材料とするため整理保管していたが、石器時代中期の円筒上層式のものと鑑定され、現在公民館に保存されている。なお本土器と伴出して発見された石器も数多い（附図第二図）。

附図説明　第2図1—4　円筒上層式土器　2・4は前北式土器破片　3は頸部目文様土器　型式不明　5・6石槍黒曜石　7・8・9石斧。

7　当　麻　内（トウマナイ五七八番地の一）（遺跡番号7）

桜井氏宅地内で穴居跡と思われるものがあるとのしらせを受け、昭和二十九年五月現地を尋ねて見た。軍国時代の蛸壺式のもので木灰相当量が埋没されている外、擦文式土器破片数箇を見出したのみであつた。桜井氏が同宅地内及び附近で発見したと言われる擦文式土器破片は、比較的原形に近いもので、同氏は現在も保存して居られる。此の種の穴居跡は、旧土人が獣類捕獲のための、かくれ場として利用したものとも言われている（附図第三図）。

附図説明　第3図1—5擦文式土器破片

8　西　周　文（遺跡番号3）

厚真川の下流右岸の段丘地帯に在る三条氏の宅地内から前北式土器の破片が多数発見された。附近の地形から察すると、南方は大平洋に面し東南に厚真川の流れがあり、往時先住民族は魚漁をして生活するに適したところであつたと考えられる。此の地帯は尚幾多の遺跡が、残されている様に考えられる（附図第一二図6—11）。

附図説明　第12図6—11いずれも前北式といわれている土器の破片。

五　中部地区の遺跡の状況

1　概　況

現在の厚真市街は、地質学的には平凡な平地として育つて来たものと言われている。本地にはかなり早くから和人が住みつくと共に、本益地の中心地となつて、道路が四通発達すると共に、商店街を形成したものと言われている。本村の北部山岳地帯より、小川を集めて太平洋に注ぐ川は、時には東岸の山すそを巡り、時には西岸山岳の腰を洗つている。此の水の流れに沿うて、環境に尤も適した高台地で、風雪の害の少い地点を選び乍ら、先住民族もまた生活したであろうことが、次々と出土する遺跡の集団を見出すことによつても裏ずけられる。すなわち市街を中心とした近郊の高地では、各所から完形に近い土器が発見されている。殊に野幌式土器時代に属する双口土器は美事なものである。本地帯は出土量の豊富なことと、調査が容易である点から考えて、将来文化財保護条令に則つた正式な許可を得て、大々的な調査発掘を企図している。

2　振老―近悦府近郊（遺跡番号10）

此の附近は厚真市街地の発祥の地と言われ、行政の中心地として、役場、郵便局の官衙が初めて置かれた程で、移住じた人々に早くから見出された適地であつただけに、先住民族も此の丘陵地帯を唯一の住居としていたことがわかる。特に現在の専厚寺敷地より、清水氏宅を径て、厚真川と断崖にはさまれた、通称ガンケと呼ばれる地点の丘陵及び路上に、土器の破片が続出しており、子供達によつて蒐集されたものだけでも、優に復元品数箇を作り出すことが出来るものと考えられる。主なる出土品には左の如きものがある。

記

年代	時期	出土品の種類
金石併用時代（続縄文期）	二千年以降	土偶数個（亀井喜久太郎、厚真出土の土偶「先史時代」三輯昭和三十一年五月参照） 亀ケ岡式土器破片　刻文土器破片
縄文時代晩期	二千年以前	双口土器一ケ
縄文時代後期	三千年前	完全栗沢式土器二ケ

此の高台を北側に廻つたところが、近悦府部落になつて小沢を作つているが、此の西北側台地にも、後期すなわち今から三千余年前と推察される、前北式土器が家屋新築の際発見されている（附図第五図3、第六図、第七図、第八図）。

附図説明　第5図3擦文式土器、第6図1・2野幌式の装飾された土器　2は注口土器　第6図3前北式といわれている土器　第7図1—7前北式といわれている種類の土器、第8図野幌式土器時代に作られたものと考えられる土偶。

3　仁　達　幌（ニタッポロ九八八番地の四）（遺跡番号12）

早来村へ通ずる道路を、村界少し手前より右折して経ない所に、仁達幌小学校があるが、此の台地にも遺物の包含層が認められる。遺物は主として円筒下層式土器であつて、磨製石器も相当出土しているが、原形を止めるものが少い。石器は石鏃、石篦等が出土している（附図第一二図1—5）。

附図説明　第12図1円筒上層式の地方型、2—3前北式土器破片、4・5石槍黒曜石製。

4　上　振　内（通称朝日ケ丘、シイナイ三四五番地）（遺跡番号9）

最近に至るまで標高五十米位の台地で、灌木が生い繁つて自然にまかせてあつたところであるが、建築ブームの波に乗つて、村公営住宅建築予定地となり、昭和二十七年五戸、昭和二十八年十戸、翌二十九年六戸、三十年六戸と、続々近代建築の住宅街となり、新興都市化しているが、此の地は地形から推察して、自然の見張台地として利用されたものらしく、工事中に再三に亘り土器、人骨、副葬品が発見された。竪穴らしきものが人工工事の合間から発見されたが、証拠となるものが出なかつたことは残念である。

土器は円筒上層式土器の破片の外、野幌式土器の完全のもの二ケが発見されている。尚二十九年八月六日に発見された人骨は、約三百年前の旧土人と鑑定され、同時にタシロ、キセル等が出土している（附図第四図）。

附図説明　第4図1—6円筒上層式土器破片

5　振　内（ノヤスベツト六六五の一六）（遺跡番号8）

厚真市街を南方に向つて四粁余の地点の山ぞいにある阿部氏宅の前に、標高百米余の突起せる高地があるが、ここを最近に至り水田の客土及び道路の砂利採取のため切崩しを行つた。その際すなわち昭和二十八年二月頃土中より遺物が発見された。早速本地帯を調査したところ、遺物はここの

最高部面積百坪程の灌木及笹の生い茂つた一部の粘土中より出土したもので、円筒上層式土器の破片数十箇である。本地帯は灌木内であり、調査が容易でないので、自然に切崩れることを待つたが、その後新しい出土品はなかつた。なお現地は相当高地であり、地質は水成岩で大昔の時代は海中或は海岸地帯であつたことが認められ、かつては海岸線の上陸地点に住居址を形成したものであるように思われるが、その後の出土品がないため調査は打切られている。此の高地を南端として、丘陵は遠く海岸と平行しつゝ東南に続いているので、此の線に沿うて新しいものが発見され、未確実な調査を裏付けられることを期待し、同時に一エポックを画したいものと念じている（附図第五図1・2）。

附図説明　第5図1・2円筒上層式土器破片、2は同地方型式。

6　東老軽舞（遺跡番号11）

祭老より厚真川を渡つた東側の川沿を北へ行けば東老軽舞部落がある。同地の工藤逸太郎氏より届出された土器破片三ケは、前北式のものと考えられる。すなわち岡田橋を渡つたつき当りの土手を、昭和三十年春切崩した際発見されたものであると言われ、同地附近を調査する必要に迫られている。尚同部落の中心附近の森本勘一氏の宅地内にも、石斧が一ケ発見されて届けられているが、現在までにはその他の出土がない。なお家屋が新築されていて、附近の調査にはやゝ困難なところがあるが、将来相当範囲に亘つて調査することは有意義だろうと思はれる（附図第一〇図2・3・4）。

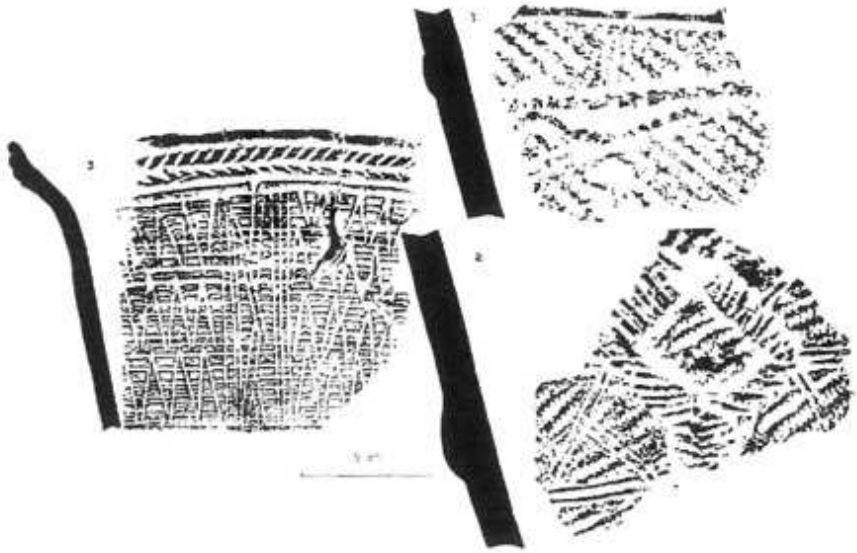
附図説明　第10図2・3前北式といわれている土器破片、4石小刀（石匙）。

六　北部地区の遺跡の状況

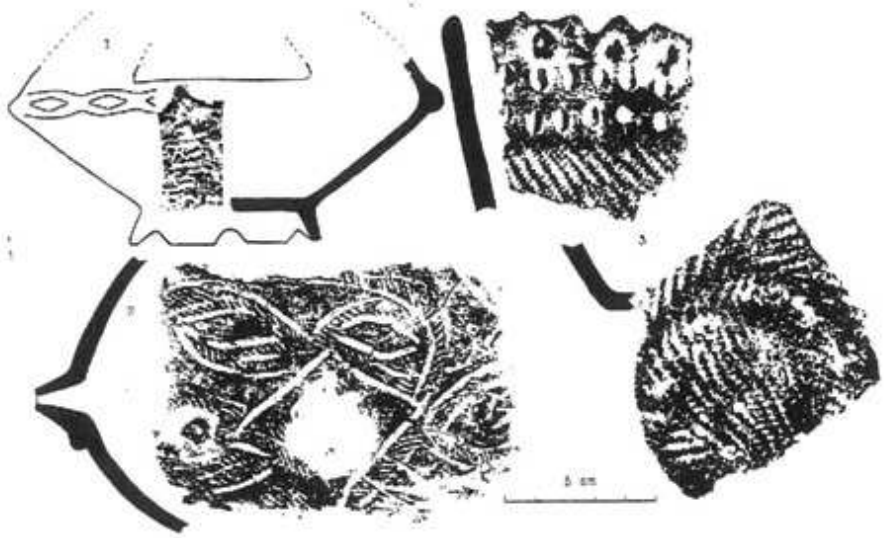
1　概　況

厚真川を北部へ向つて遡るに随い、河岸に沿つて拡がる原野が急激にせばめられた、通称ガンケと言はれる地点を越すと、両岸約一粁が次第に拡がるが、更に東老軽舞、西老軽舞を経てトニカに至り、稍々広大な田地を形成している。旧土人は先住民族の末裔ではあるが、東側の台地に群集して住居しており、祖先の墳墓の地として種々の伝説や、物語りの発生地として名高い、延々として狭溢ではあるが、肥沃な水田地帯は、幌内、上幌

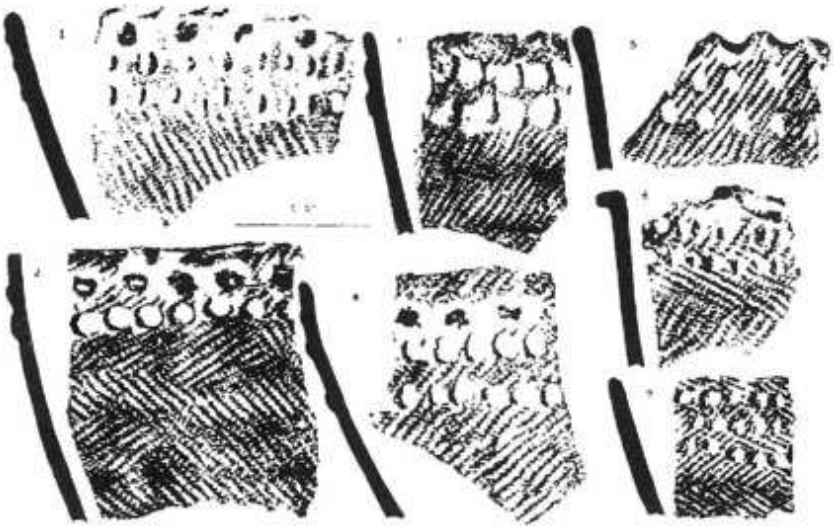
第５図　掘内・掘老発見の土器１
（1．2 掘内　3 掘老）



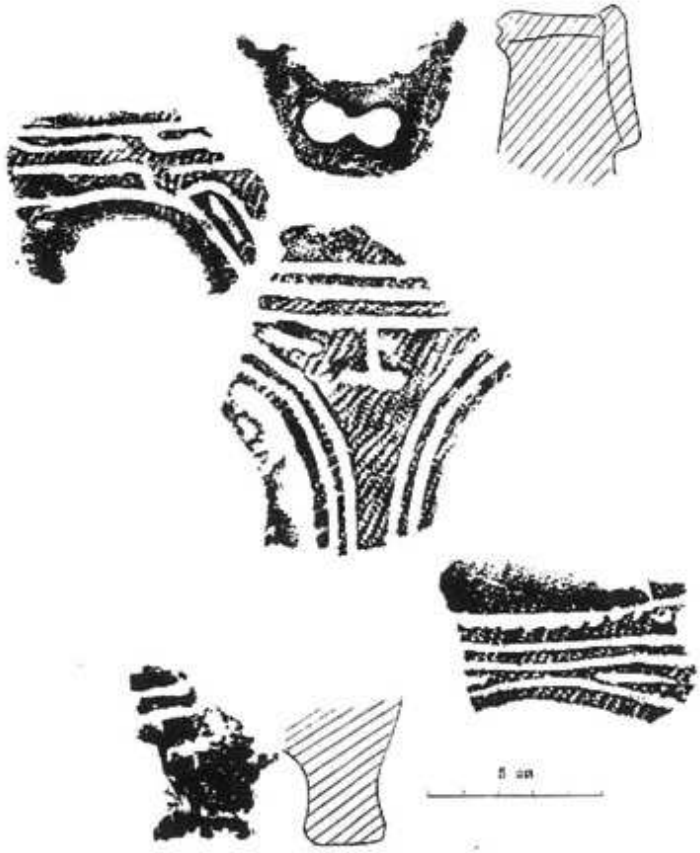
第６図　掘老発見の土器２



第7図 振老発見の土器3



第8図 振老発見の土偶



内と続き、いよ／＼せばまると共に、海抜も漸次重なり、河も小川となつて急流となり、遠く夕張山脈に連なつている。

2　楢　山（メナホロナイ二三六番地）（遺跡番号13）

旧土人の住居や、墳墓等の跡が、未だ新しく感ぜられる土地だけに、先住民族の足跡も各地点より発見されている。楢山小学校前を走る道路の東側は厚真川の河岸で、三十米余の断崖を作つているが、そのくずれかゝる土中より、昭和二十年頃土器破片が発見された。此の土器は前北式であるが、同時に石器も出土している。なお資料が数個のみであるため、その後の発見を期待して、調査を実施したが目星しいものは発見されなかつた（附図第九図）。

附図説明　第9図1・3・4・5野幌式土器破片、2・6・7前北式といわれている土器破片、8彫刻のある石製品。

3　幌　内（遺跡番号14）

厚真市街より約十二粁余の奥地ではあるが、数十戸の連帯せる幌内市街がある。その北偶の幌内神社境内は、昭和二十九年移転新築した幌内小学校の校地となつて、漸次切崩されつゝあるが、その土中より円筒上層式土器の中の、羽状文を施した土器破片が出土している。昭和三十年春巡動会の折、切崩しを実施すると聞き、現地へ赴き調査したが、新しい様態のものは見出せなかつたし、大場博士が来村の折も、竪穴と想定された箇所の二点について、調査を行つたが、竪穴と決定するまでには至らなかつた。然し土器破片が続出しているので、将来注目に値する地点である。

尚同地より約二粁上流のオニキシベ沢（遺跡番号15）入口の竹山氏宅地内より、昭和二十九年春土器破片が相当出土したと言われるので、調査した処円筒上層式土器が発見された（附図第一〇図1）。

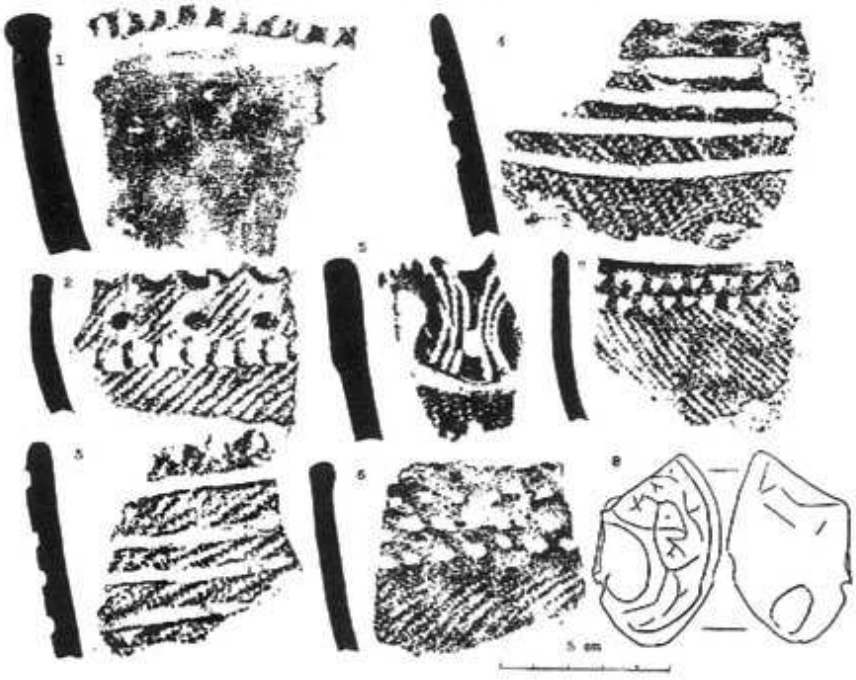
附図説明　第10図1円筒上層式土器底部の破片。

4　頗　美　字（遺跡番号16）

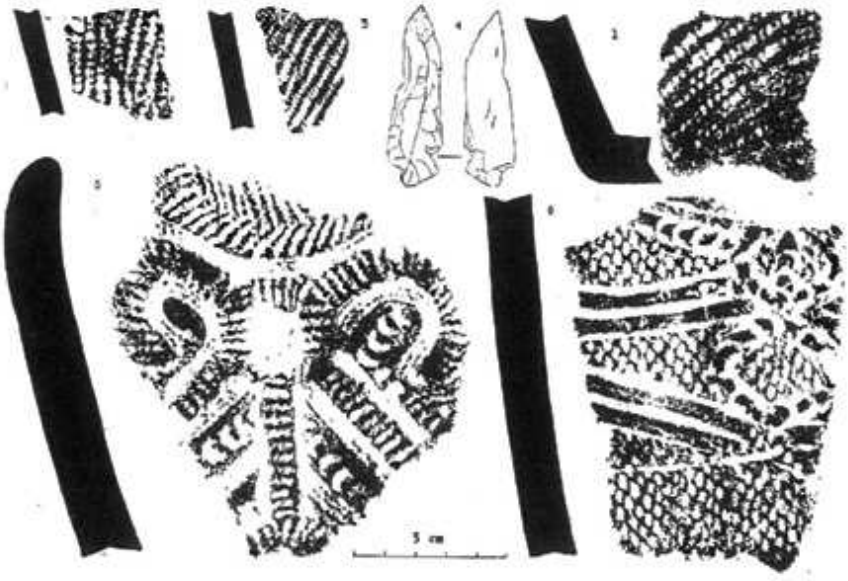
頗美字は厚真川の支流々域で、昭和三十年十月下流の高木氏宅地からと、上流の日西氏の宅地内から、何れも円筒式土器の破片数個と石器数個が発見された。此の地域は、昔は追分、紅葉山方面へ越す通路であつたらしいことゝ、河川からは簡単に川魚が捕られ、獣類も多く先住民族の生活に適していたことが予想される。

尚昭和二十五年十月頗美字小学校改築の際遺物が出土したことがあるが、その当時現場に居た人々が語るところによれば、土器は壺形のものであ

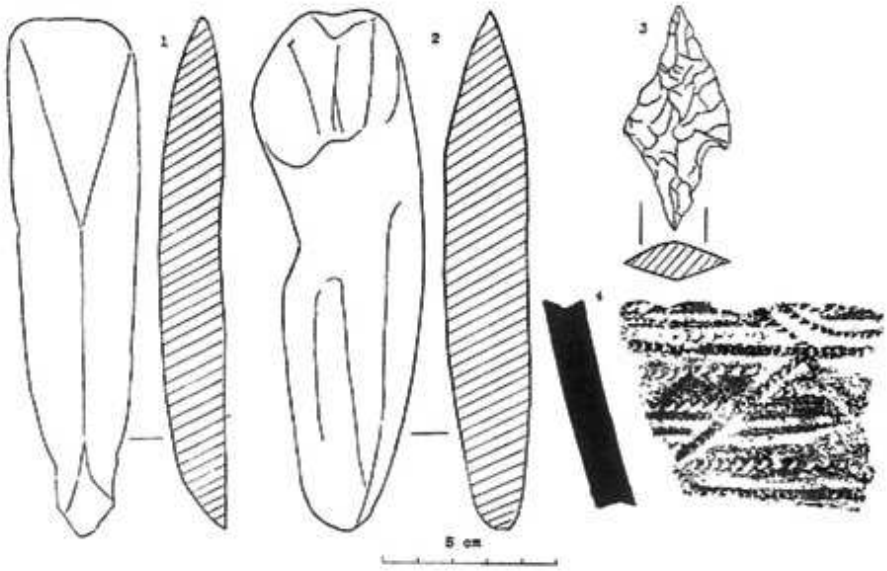
第 9 図　楢山発見の土器及び石器



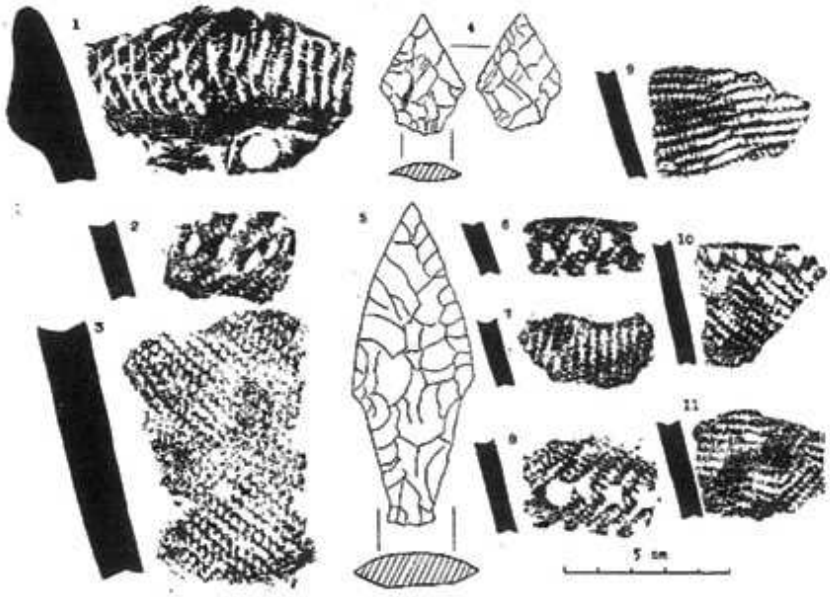
第 10 図　幌内・東老軽舞・オニキシベ発見の土器及び石器
（1 幌内 2, 3, 4 東老軽舞 5, 6 オニキシベ）



第 11 図　頴美字発見の土器及び石器



第 12 図　仁遠幌・西岡文発見の土器及び石器
(1—5仁遠幌　6—11西岡文)



つたと言うことである。当時此の種の研究がまだ行われていなかつたので、遺物は土中に埋されたまゝ埋められたと言われているが、資料を失つたことは非常に残念である（附図第一一図）。

附図説明　第11図1・2石斧、3石槍、4前北式といわれている土器破片。

七　結　言

最近とみに考古学の研究が盛んとなり、上述した様に遺跡及び遺物について、その概要を綜合的に纒め得るようになつた。又それを集約して附表一表及二表の如き一覧表を作つたが、今後の発見や屈出を加えて漸次堀下げた、研究を続けて行きたいと念願している。

今古代を種々想定するに、厚真川は原始人が川漁をするためには地勢その他の条件から見て、非常に容易であつたことと思われ、先人達は全村をあげて川を中心として住んでいたことが考えられる。

なお神がゝり的であり、かつ伝説的であつた古来の歴史は、昭和二十年の第二次世界大戦終了を契機として、日本から消え去つて、新しい教育の歴史を作り出す使命が此の世代に与えられたことは、我々の夢想だになし得なかつた事である。

我々の郷土の歴史を一歩〳〵辿つて証拠だて、歴史の深さと巾を持たせて行く役目を果すものに、考古学の研究が必要とされ、且つ先人の遺跡を探究し続けて置くことが、我等が過去を知り現在を反省する資料であり、そしてまた将来我等の生活を再び子孫が探究する時のための資料ともなることであろう。

出来るだけ早く我等の郷土に残された遺跡と遺物の全貌をとらえて残したいものと考え、心あるものが集い合つて得たものが、この未熟な記録であることをここに述べて結言とする。

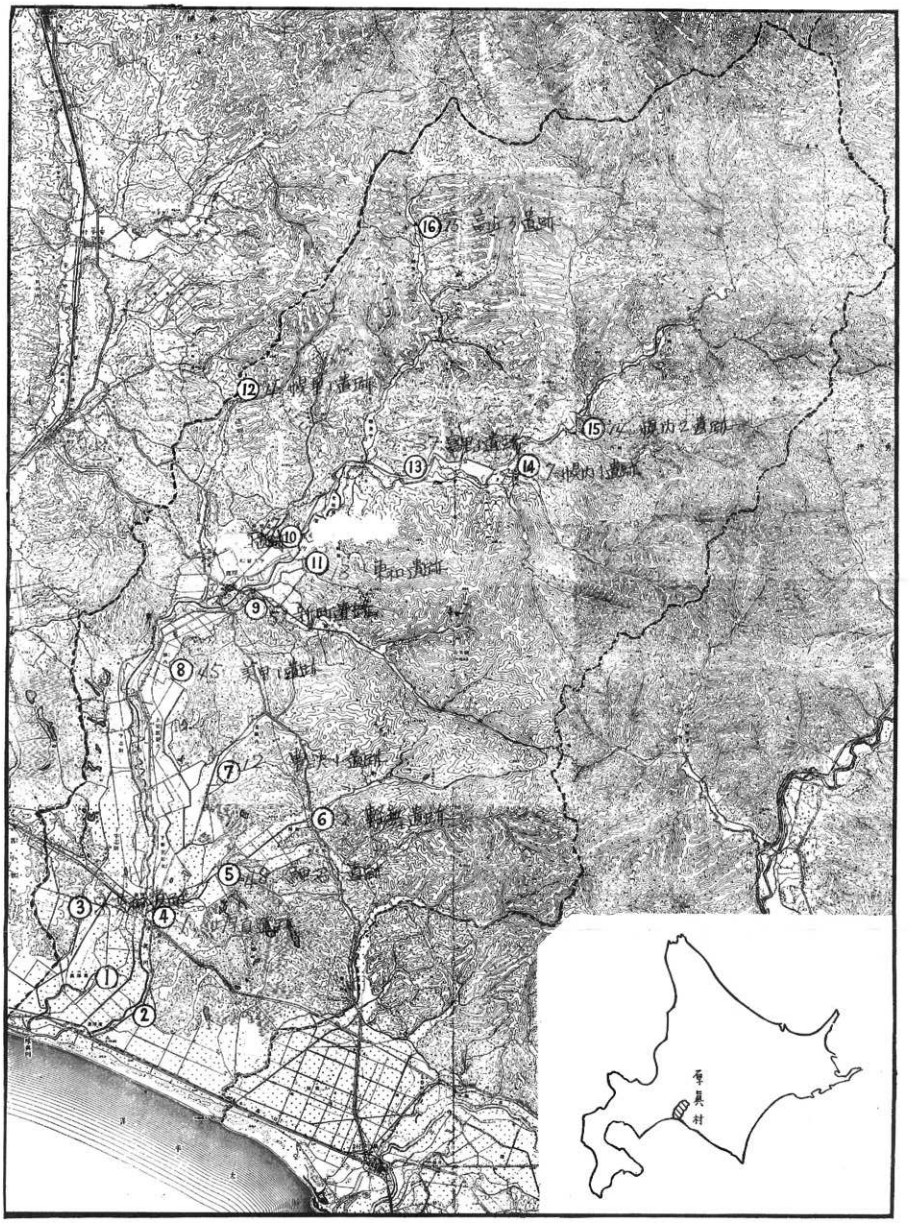
厚真村内遺跡発見一覧表　（昭和31年4月30日現在）

時代				石器時代					金石併用時代	備考
推定年代				至7.000年前 自6.000年前	至6.000 自5.000	至5.000 自4.000	至4.000 自3.000	至3.000 自2.000	至2.000 自1.000	
編年時期				早期	前期	中期	後期	晩期	続縄文期・擦文期	
遺物の種類と様式 / 地図番号	出土地の年月日	出土地の地番	出土地の通称名							
				住吉町式 春日町式				亀ケ岡式	擦文式	
					円筒式 下層式	円筒式 上層式	野幌式	栗沢式		
						余市式				
					北筒式				北海道式 刻文式	
				綱文式			前北式	後北式		
									オホーツク式	
1	昭和29. 5	トアツマ 951の1	東厚真 坂本所有地			円筒式破片 数ケ				
2	30. 5		周文 宮崎宅地			同上				竪穴趾
3	31. 4		西周文 三条宅地				前北式 破片多数			
4	20. 2	ノヤスベ 231の3	上厚真 小学校庭			円筒式破片 数ケ				
5	30. 6		上周文			同上				
6	24. 5	カルマイ 970の12	軽舞 小中学校庭				前北式			石器数ケ
7	29. 5		当麻内 桜井宅地外						擦文式破片 数ケ	
8	2. 28. 2	ノヤスベ太 665の16	下振内 岡部宅地			同上				
9	28. 10	シイナイ 345	上振内朝日ケ丘中央小学校庭前方			同上	野幌式 完全2ケ			竪穴趾
10	大正 5. 6	フレオイ 511	振老 清水宅地					亀ケ岡式注口 2ケ 栗沢式2ケ	擦文式破片 刻文式破片 数ケ	
10	同	同	同				土偶破片 数ケ	亀ケ岡式 破片多数		
11	昭和29 .5		東老軽舞 妙見坂				前北式 破片数ケ			石器数ケ
12	29 .5	ニタツポロ 988の4	仁達幌 小学校前			同上	前北式			
13	20. —	メナホロナイ 236	楢山 小学校前				前北式 破片数ケ			石器数ケ
14	25. —	メナホロナイ	幌内 小学校前			同上				竪穴1ケ
15	29. 5	メナホロナイ 929の1	オニキシベ 竹山宅地			同上				
16	30. 10	ハビウ 120	瀬美字 日西宅地			同上				石斧1ケ

「厚真村に存在する遺跡」の地図説明

1 浜厚真
2 周文
3 西周文
4 上厚真
5 上周文
6 軽舞
7 当麻内
8 下振内
9 中央小学校前
10 振老
11 東老軽舞
12 仁遠幌
13 楢山
14 幌内
15 鬼岸辺
16 顔美宇

厚眞村に存在する遺跡



厚真村古代史

昭和三十一年七月一日印刷
昭和三十一年七月十日発行

〔非売品〕

印刷所　札幌市北一条西二丁目
札幌印刷株式会社

発行者　勇払郡厚真村
厚真村教育委員会
厚真村郷土研究会